

國學院大學學術情報リポジトリ

「神道」はどう翻訳されているか：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-22 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, ウエイマイヤー, アン, マクナリー, マーク, ベンテリー, ジョン・R, マセ, フランソワ, 魯, 成煥, ハーディカ, ヘレン, プロール, インケン, ベルトン, ジャン＝ピエール, 櫻井, 治男, ロコバント, エルンスト, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000502

【実行委員長（井上順孝）】

最初のセッションにまいります。本日は、司会を上智大学の中井ケイト先生にお願いしております。中井先生は上智大学にお勤めと同時に『モニュメンタ・ニッポニカ』(*Monumenta Nipponica*) の編集をされておりまして、日本と国外の情報の風通しがよくなるようにと、日々頑張っている方です。非常に得難い方を司会者にお招きいたしまして、我々としてもうれしく思っております。

それでは、中井先生、どうぞよろしくお願いいたします。バトンタッチいたしますので、ウェイマイヤーさんのご紹介と第1部の司会をお願いいたします。(拍手)

【司会（中井）】

ご紹介いただきました中井と申します。どうぞよろしくお願いいたします。司会は慣れないのでお聞き苦しいことがあると思いますが、よろしくお願いいたします。

最初の発表者はアン・ウェイマイヤー (Ann Wehmeyer) 先生です。彼女はミシガン大学で学位を取って、いまフロリダ大学で日本文学の担当をいらっしゃいます。研究のご専門は歴史言語学で、言語論が歴史的にどう発展したかにご興味をもって、数年前に本居宣長の『古事記伝』第1巻を英訳されました¹。恐らく、今日のご発表はその『古事記伝』第1巻のご経験に基づいたお話になるかと思いますが、同時に日本語の表記法にもご興味を持ち、いま神代文字の研究もなさっているそうです。

それでは、よろしくお願いいたします。

発題

アン・ウェイマイヤー

ご紹介ありがとうございます。このたび、国学院大学で神道文献翻訳と一緒に考えさせていただく機会をいただき、まことにありがとうございます。私の日本語は聞きづらいかと存じますが、どうかよろしくお願いいたします。

本格的に本居宣長の作品を中心にした発表に入る前に、この発表内容の資料とした翻訳の仕事に対する前提を2〜3挙げたいと思います。国学は思想史上、言語学の歴史上、大変価値の高い文献ですから、翻訳にあたって単なる意識、間接な言い換えだけでは物足りないはずです。ヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin) の考えでは、原文テキストは当時の読者が読んだときに独特の効果があつたはずで、そこで、翻訳の際にはその原文効果の響きを起こすようにしなければなりません。

その効果の響きを起こすためにはシュライエルマッハー (Friedrich Schleiermacher) の説が参考になるように思われます。読者が翻訳テキストを理解しようとするときには、著者の使った言語の真意を把握し、その人特有の思考回路や感情を理解する必要があります。

したがって、訳者は著者を刺激することなく、できるだけ平穏な関係を保ちつつ読者を著者のほうに引きつけるように努めます。

さて、本居宣長の場合、その議論の説得力は、ある程度本居の書き方や言葉の遣い方によるものであります。翻訳の際、その言葉の勢いを守って再現することが一番難しいと思います。ここで、具体的に翻訳の際、本居の言葉遣いについて頭を悩まされた例を挙げたいと思います。

(1) 神道にかかわる重要な訳語の統一にかかわる問題

(イ) 表記が違ってても言葉が同じ場合

最初に、国学にかかわる重要な用語の訳語統一についての問題です。シュライエルマッハーの説では、いい翻訳というのは、一つの言葉がいくつもの全く異なる表現を含まないほうが望ましいというのを原則にしています。また、原文における関連表現の多様性を訳に行きわたらせないほうがいいということです。

それは原則としていいことですが、言葉は実際にはただ一つの意味を持っているわけではありません。そして、本居の場合、ただ一つの表記の仕方をしません。その例として、「あや」という言葉は『古事記伝』では何か所かに出てきますが、必ずしも意味が統一しているわけではないように思われます。

「あや」は、中国の文字を使って文を飾る意味が一つです。「^{モジ}学^{アヤ}の文」²が、その例の一つです。この「あや」の裏には中国での天文、地文の意味も含まれています。つまり、一つの漢字である「あや」が天や地の模様を反映していると考えられるのです。

本居は後に日本の歌、祝詞、宣命においては古語のままで、「^{コト}言^{アヤ}に文をなして」³と記されていますが、この「あや」の意味は少し違います。

ここは英語では、**words had a design to them** と訳しました。大野晋の『古語辞典』⁴では、「あやなし【文なし】」の意味は『あやどり』に同じと、「あやどり【文どり】」は「美しくいろどる。いろいろと変化をつける」と定義しています。本居は祝詞、宣命以外の、「かならず詞を文^{アヤ}なさずとも有ルべきかぎりは、みな漢文にぞ書^{カキ}りける」⁵と書いてありますが、このときは英語では **those which did not require a special design** というように訳しました。

また、上の、「^{カラフミンアヤ}漢文章」⁶に対して、他のところでは、「^{カラコトバ}漢文章」⁷というふうに、「あや」ではなく「ことば」というように振り仮名を付けています。

また別の問題は、言葉の曖昧さによるものです。これは簡単な例ですが、たとえば遠い昔を指す言葉に、「古へ」、「上ツ代」など、一体どのくらい昔のことを指示するかわからないために、英語では **antiquity, ancient times, in the past** などと訳すことになります。

もう一つ翻訳の際に困ることは、本居が言葉の表記の仕方を少しずつ変えていく過程で微妙なメッセージを伝えようとしていることです。例えば、「てにをは」の表記の仕方

(「^{テニヲハ}辭」⁸、「^{テニヲハ}助辭」⁹、「^{ニハル}亙爾袁波」¹⁰)はその一つの例です。これは結局、英語に訳さないで、ただ、「てにをは」にして注を付けました。しかし、本居のポイントは、テキストを読むときにはあまり字を中心にしなくて読むべきだということです。こういうことは翻訳ではどうしようもなく、何もできません。

(2) 訳語の違いが大きな解釈の違いを生じさせる例

次に、訳語の違いが大きな解釈の違いを生じさせている実例があるかどうかについて一つ例を挙げたいと思います。これは「上代の^{マコト}正實」¹¹、「^{マコト}實の」¹²、「まことの理」¹³という例文ですが、こういった同音ではあるが表記の異なる例が多くあるので解釈時及び翻訳時に問題が起こります。

「まこと」という言葉は真実、事実という意味が含まれているので、英語に訳すときは facts にするか、truth、あるいは true nature にするかは決めにくいことがあります。

(3) 神道関係の用語が一般の日本文化の用語と比べてとくに翻訳困難か

(イ) 「たま」

神道関係の用語が一般の日本文化の用語と比べてとくに翻訳上の困難さが感じられるかどうかというテーマです。『古事記伝』では、「たま」という言葉が英語に訳しにくい言葉の一つでした。これは何か所も出てきますが、例えば、「^{ミタマ}魂」(「天」は魂を持たない)¹⁴。

「^{ミタマ}神霊」(「天に^{ミタマ}神霊あるが如くいひなして」¹⁵)。まあ、出て来るたびに字、表記の仕方が違ってきます。「^{ナホビノミタマ}直毘霊」¹⁶、「^{ミクニタマシヒ}皇國魂」¹⁷、「人はみな、産巢日神の^{ミタマ}御霊によりて、生れつるまにまに」¹⁸。

参考として、一つの定義を挙げたいと思います。ここでは国学院大学日本文化研究所編『神道事典』の説明を引用します。「たま 古代における靈魂の一般的呼称。人格的な靈魂のほか、自然の精霊や靈威をも含んでいる。……(中略)……『たま』の尊称が『みたま(御魂・御霊)』であるが、^{みたま}神霊と表記するときは神の靈のことを指す」¹⁹。この定義では、「^{ナホビノミタマ}直毘霊」の「たま(霊)」と、「^{ミクニタマシヒ}皇國魂」の「たま(魂)」の意味がぴったり合わないようにも思われます。英語のほうでは仕方なしに、どれも spirit と訳しました。しかし、英語の power や force に近い意味もする気がしました。

(ロ) 民間語源

もう一つ難しいところは、重要な言葉の意味を説明するときに国学者が民間語源に近い説明をするところですが、これはとくに新宗教では盛んに使われることです。これはほと

んど証拠なしで、言葉の本当の意味を説明しようとするときに自由に語源を組み立てていきます。

たとえば、「かな（仮名）」の意味が一つとして挙げられます。本居の『古事記伝』においては、「かな」は次のように定義されています。「假字とは加理那なり、其字の義をばとらずて、ただ音のみを假て、……那は字といふことなり、字を古名といへり」²⁰。

他方では、平田篤胤が『神字日文伝』では、「かな」の語源を「神字」としています。「御國の文字を加奈といふは、加牟奈の省なり。加牟奈を漢字に譯しては、神字と書くべし」²¹。翻訳するには別に問題はありますが、そのままでは仮名の語源が正しいかどうかという疑いが残るわけです。

(4) 神道の特質が翻訳の過程で浮かび上がる例

次は、神道という宗教の特質が翻訳する過程で浮かび上がってくる例ということです。とくに国学を読むときには、愛国主義が神道の理解を広げていくために妨げとなりがちであると思われます。

例えば、「皇大御國は、掛まくも可畏き神御祖天照大御神の、御生坐る大御國にして、萬ノ國に勝れたる所由は、先ヅここにいちじるし」²²というのは、外国を排除するような考えで外国人にはなつきにくいです。神道は日本に特有な宗教でしょうけれども、日本が外国より勝れたことをいつも強調するとちょっとなつきにくいです。これは世界の宗教のどれもやっていることでしょうけれども、国学はとくに盛んなように思われます。

(5) その文献特有の問題点

(イ) 引用文の出典

特定の文献を翻訳したときに感じられたその文献特有の問題点についてです。国学の文献では引用文の出典を細かく示さないのが、それを明らかにするのに手間がかかります。簡単なことですが、それは『古事記伝』の場合、高木市之助と富山民蔵の『古事記総索引』²³がなければ翻訳できないくらい大変な仕事です。

(ロ) 作品を徹底的に遡らないと誤解が生じる

もう一つですが、国学の文献では、一つのテーマが何人かの作品を通して長く続くとき、それを徹底的に遡らないと誤解が生じることになります。ここは本居の例ではありませんが、私が勉強していることから一つの例を挙げたいと思いますが、これは遡らないで誤解が生じたような一つの研究です。最近出版された、『徳川思想文化の中の易経』²⁴という書

物です。著者はまるで大国隆正が『学統弁論』で神代文字理論を発見したように書いています。これは、翻訳の問題ではなくて解釈の問題なのですね。翻訳する前には解釈します、解釈が間違っていればもちろん翻訳が間違ってきますね。

His most striking idea was that, in the Age of the Gods, Japan had possessed its own written system, which he termed “*jindai moji*” and believed was the mother of all languages, including Chinese, Sanskrit, and Dutch.²⁵

それから、著者は大国が太占の町形^{まちがた}や、亀卜の町形を神代文字そのものだと捉えていると説明しています。というのは、その下にこういうふうに書いています。

Table 10 shows his transformation from *jindai moji* to hexagrams and thence to Chinese characters.²⁶

エン (Wai-Ming Ng) さんの説明では神代文字が象形文字のように見え、その結果として平田や大国の神代文字から遠く違ってきます。この話を何度も読んで頭を悩まされました。私の解釈では、その形は神代文字ではなく町形です。私の解釈が間違っているのかもしれない。

(6) 翻訳で失われる、微妙だが重要な日本語表記の違い

上でも触れましたが、ほとんどの翻訳において必ず失われる、微妙ではあるが、重要な日本語表記の違いについてもう少し詳しく例を見てみたいと思います。

(イ) 一か所ひらがなで書かれた言葉が今度漢字で書かれる

一つは、一か所においてひらがなで書かれた言葉が今度は漢字で書かれることです。例えば、「かざらずて」²⁷、「飾^{カザリ}なくて」²⁸、「潤色^{カザリ}」²⁹、「虚偽^{カザリ}」³⁰。こういう例は、文字通りひらがな、漢字の表記だけからでも意味がわかる。英語に訳すときに *lack of ornamentation*, *unadorned*, *unembellished* など、いろいろな言葉が当てはまりますが、字は変わりありません。全部ローマ字です。

本居は、こういう過程で何も言わなくても字と振り仮名としての言葉の本来のつながりを変化させ弱めていきます。後に「訓法^{訓ミザメ}の事」では「虚偽^{カザリ}」³¹と書いたところを振り仮名の意味を無視して *falsehood* と訳しましたが、これも漢文の飾りという意味を込めて、虚偽ではなく、「かざり」という振り仮名を使ったのでしょう。

それから、本居は振り仮名だけで本格的なメッセージに達する魅力が独特です。つまり、それは字が漢文でも言葉が御国の言葉であるという点によるものです。これは弟子に訴える、自分で発見させる教授法だと思われます。これはとくに『古事記伝』で目立つ技術で、他の作品にはそれほど盛んに使われていません。先駆者契沖、賀茂真淵においては、その技術はあまり頻々に使われていないように思われます。

例えば、「義理^{ヨリ}」、「學問^{モウモン}」、「漢籍^{カンセキ}」³²等。参考には、本居は、「まして其ノ文字は、後に

「^{アツ}當たる^{カリ}假の物にしあれば、深くさだして^{ナニ}何にかはせむ」³³と書いてあります。それは、そのたくさんの例の次のページにあります。

平田篤胤になると少し違ってきます。というのは、篤胤は漢文的な言葉を自由に作って適当に訓読みを与えます。あるいは、これは当て字に近い記し方であるかもしれません。その例は、「信^{まこと}偽^{いつはり}」、「倭^わ鬼^{けもの}」³⁴、「驗^{しるし}體^{がた}」³⁵、「用^{つかひ}格^{ぎま}」³⁶などです。

(ハ) 黒括弧などの文の構造点

最後に、テキストの形について一つ気になった例を挙げます。『古事記伝』は注を付けないで、代わりにテキストの中で黒括弧【】を用いて、説明や、少し離れた立場から同じことについての詳細を書き込みます。その手法は、読者が自然に2つのグループに分かれるためにとられたかどうかははっきりしません。

また、これは翻訳するときにもどのように扱うかを決めなくてはいけないことの一つです。私はただ同じふうに、注にしないで、括弧に入れて訳しました。しかし、日本語の原文では括弧のところの字が2ポイントぐらい小さくなっています。そういうやり方は英語の本ではあまり見当たらないので、字の大きさは他の字と同じにしました。

ここはまた別な話題ですが、どうしても翻訳の際には英語に訳さないで、日本語のままにしておく言葉があると思います。『古事記伝』の場合は、そういう言葉は次のとおりです。

「ものがたり」(物語)、「のりと」(祝詞)、「せんみょう」(宣命)、「かばね」(姓)、「てにをは」、「ていかのかなづかい」(定家仮名遣)、「にっしょう」(入声)という言葉です。

(7) 今後どのような文献を翻訳することが神道の理解を広げるうえで有用か

最後のテーマとしては、今後、どのような文献を翻訳していくことが神道の理解を広げる上で有用かという点です。愚見としては、神道の理解を広げる上で有用なのは、『万葉集』の翻訳であると思われます。現在、英語では部分的にしか翻訳されていません。日本学術振興会³⁷、リービ英雄 (Ian Hideo Levy) ³⁸の訳がその代表です。

しかし、単なる翻訳だけならば、文化的理解のためには役に立たないと思われます。もっと、ドナルド・フィリップ (Donald L. Philippi) の『古事記』の翻訳³⁹のように、人類学の視点を通して細かく入念な描写を取り入れて訳せば、もっと神道的考え方や信仰がはっきり見えてくるように思われます。とくに、『万葉集』の歌に潜められているアニミズム信仰を掘り出すことは価値があると思われます。

部分的にいろいろな点から触れてみましたけれども、以上です。(拍手)

質疑応答

【司会】ありがとうございました。いろいろ、とくに国学に特異な英訳の問題に触れられました。個人的に気になったのは、表記、ひとつの言葉に2つの意味を同時に生かせる方法のことで、とくに英語に訳すときは非常に扱いにくいと思います。

それでは、これから質疑に入りますが、あらかじめお名前とご所属を言っていたいただければと思います。どうぞ。

【森瑞枝】国際宗教研究所の森と申します。大変興味深くお話を伺いました。ここで出されている問題は、日本語から外国語への翻訳の問題だけではなくて、日本語の古い文献を現代語訳するときの問題点と全く重なっている点で、同じだなと思いました。

翻訳、とくにこの宣長の『古事記伝』の場合、彼自身が文献を読むときの態度と、自分が書いている場合とは随分違うように思います。そうすると、とても難しい問題として漢字表記が複数あるということ。さらに、振り仮名にいろいろなバージョンがあるということです。これを統一しようというのはとても難しいから、むしろ漢字表記のほうを優先したくらいでもいいのではないか。私などが現代語訳を試みるときにはやっていますが、どのようにお考えなのかお聞きしたいと思います。表記の問題が日本語の現代語訳でも共通する問題だということです。

それからもう一つ重要だったと思うのは、(4)の神道という宗教の特質を翻訳する過程で問題になる特有の語彙として、「皇^{すめらみこと}大御国^{おほみくに}」とか、「大御国^{おほみくに}」という表現をどのように解釈するかという問題を指摘されていて、このことが国学のイメージとか神道のイメージにいろいろ関わってくるとおっしゃっていること。これは、本当にそのとおりだと思います。この言葉をどう評価するかによって、宣長とか国学全体のイメージまでとても大きく影響を受けてしまうので、やはりこの言葉を翻訳して、神道あるいは国学の資源を生かしていく方向で翻訳するにはどうしたらいいかというのはとても大きな課題です。

例えば、これを美称と取って、もちろんナショナリズムの自国中心主義的な発想があるけれども、「我が国」ぐらいで、そういうニュアンスで取ってしまったら、これは『古事記伝』の翻訳にとって、訳者の解釈を交えてしまったような行き過ぎになるのかどうか、その辺りをどう処理されたのか伺いたいです。

【ウェイマイヤー】最初のご指摘は、非常に興味深いご指摘です。聞いていて考えたのは、『古事記』そのものも同じですね。本居にとっては大昔のことなんです。原文は漢字だけです。その読みはまだありません。本居や、本居と同じ頃の人が考え出して書いたわけです。ですから、本居から見て遠い昔、私たちから見て本居は遠い昔でもないけれども昔です。そして、言葉、字。そして、その上に振り仮名がある場合には、その振り仮名が入った部分を無視して翻訳したほうが良いとおっしゃったのですか、その点がはっきりわからなかったのですが。

【森】無視ではないですが、振り仮名のほうを優先すると全く同じタームになりますね。

そこに全く同じ言葉を和語で当てていることはもちろん念頭に置かなくてははいけませんが、むしろ、これは表記のほうを重視してそちらにアクセントを置いた訳語で構わないのではないかと思います。そうすると、和語では同じように統一しなくてはいけない場合でも、翻訳のときに変わってくるのは全く当然のことで、これは解釈が当然入ってきますが、それをやらないとむしろ翻訳の意味がないのではないかと思います。

【ウェイマイヤー】はい、そのとおりです。そして、愛国主義の問題ですが、西洋ではどちらかというと、あまりそういう、「萬ノ國に勝れたる」という話が出てくると、無視して翻訳しないことにしていると思います。私は、言葉が出てくればそのまま翻訳してもかまわないと思います。ただ、裏にある哲学みたいなところを少し説明しておかないと、翻訳だけでは何か物足りないような気がします。

【司会（中井）】他にご意見はございますか。

【安蘇谷正彦】国学院大学の安蘇谷と申します。いま森さんが指摘したことと関係しますが、森さんの質問の中に例えば、「皇大御国は……」という言葉はどういうふうに訳したか。例えば、「我が国」と訳してもいいのかという質問がありましたが、その点についてお聞きしてから続けたいと思います。

【ウェイマイヤー】ちょっと勘違いがありました。失礼いたしました。そこは our imperial country あるいは our imperial land というふうに訳しました。

【安蘇谷】わかりました。今度は私の質問ですが、ちょっと聞き違いがあったかどうかわかりませんが、要するに、日本人の国学者の中に日本の国が勝れていると言っていることについて、翻訳するときに気をつけたいという気持ちはわかります。しかし大事なことは、宣長がなぜ日本の国が勝れているかという理由を、天照大御神あまてらすおみかみという太陽が日本で生まれた、だから、日本は勝れていると言いたいのだというふうに、そのままお訳しになっても問題ないのではないですか。

例えば、中世の北畠親房が、なぜ日本が勝れているかという、要するに、日本は神の国であって神の子孫が統治する、そういう国だから勝れていると、きちんとした根拠を述べているわけです。ですから、その辺りのところを、どこの国でも自分の宗教は最も素晴らしいと誰でも言うわけですし、いまでもアメリカでは「自分たちを神が守っている」とかおっしゃっているわけです。日本の国はこのごろ、「神州」とか言わなくなってしまうし、「神の国」などと言えばマスコミが批判します。それはおかしいと思います。

大事なことは、宣長がなぜ日本の国が勝れた国と言っているか、その根拠を翻訳の中に入れられてもよろしいのではないか。つまり、神道指令の影響が何かわかりませんけれども、国学や神道はウルトラナショナリスティックなものが強いのではないかという偏見を持たないで、なぜ日本が勝れていると言っているのか、その理由、根拠をきちんと示せば翻訳としては十分ではないかと思います。

もう一つは、こういうことをやっていらっしゃる先生に本当に頭が下がるんですけども、私も『古事記伝』を去年まで大学院で読んでいました。黒括弧のところですが、これは英語の文章には馴染みが薄いということで、注にしないで本文と同じくしたということこ

ろが気になったわけです。

間違っているかどうかわかりませんが、宣長はまず、初稿本がありますね。その後また注をつけますが、その後また注をつけていくわけです。その書き方の中に、つまり黒括弧で囲んで、しかももうちょっと小さい。つまり、木版本などを読むと本文があつて、その後ちょっと小さい字で注が書いてあります。その後、もう一つ小さい字でも書いています。

ですから、少なくとも本文と同じという形での取り扱い方はよくないのではないか。そのところ、もちろん宣長の『古事記伝』の初稿本は見えていないのでわかりませんが、そうすると、その注をつけていく段階で宣長自身がどうしようかと迷ってつけたところがあるわけですから、それを少なくとも本文と同じ大きさというのはちょっと具合が悪いのではないかと思います。

【ウェイマイヤー】どうもありがとうございました。参考にします。

【司会】この表記の問題で、例えば、さっきの「すめらみくに」という言葉を使うことによって、もう一つの問題として当時どういうふうに響いたかが問われるわけです。例えば、「すめらみくに」か「皇国」かという場合は、恐らくニュアンスが違うと思われます。英語で、同じく *imperial kuni*, *imperial country* になることによって、それをどういうふうに扱えばいいか。簡単な答はないと思いますし、一貫した、いつも使えるような回答はないと思います。

他にご質問、ご意見、はい、どうぞ。

【関一敏】九州大学の関と申します。質問ですが、(3) の (イ) で、「みたま」のことを取り上げられて *spirit* と訳されたのは、この全部をこのように訳されたのですか。これは本当に純粋な質問で、第2の質問とか一切ない質問ですが。どういう候補をお考えになって、そしてどういう理由で *spirit* にされたのか。これをちょっとお教え願いたい。

【ウェイマイヤー】はい。どうもありがとうございます。辞書を引いてみれば *soul*, *spirit* と2つぐらいしか言葉が出てこないのですが、*soul* はキリスト教と結びついており、自然や無生物は *soul* を持たないので、*spirit* と翻訳するより方法がないのではないかとって、*spirit* にしました。……難しいですね(笑)。そのままにして訳さないほうがいいのかもしれないかとも思いました。*spirit* でもないし、もっと複雑でいろいろな意味が含まれているように思われます。

【司会】やはり、「みたま」という、そのままにしておくという方法ですか。

【ウェイマイヤー】はい。

【井上順孝】いまのことに関連してですが、これは一つの便法になるのかなと思いますが、重要な言葉で、かつ、このようにいくつかの意味がある場合には、元の言葉と、それぞれに対応したいくつかの訳を示す。つまり、「みたま」に例えば *spirit* が当てられたり、*divine spirit* が当てられたり、そういうことを示していただいたほうがいいかなという気がしないでもないです。

つまり、一方では日本的な言葉で言う、一方では漢字を当てる。そうしたというのは、そうしたかったのだろう、あるいは、そうせざるを得なかったのだとを感じるわけです。

そのニュアンスをわかってもらうために、一つの言葉がこのような多様な英語に分けられるのを示すのも一つの方法ではないかと思いますが、いかがでしょうか。すべての言葉にそれをやると大変なことになりますが、少なくともキータームといいましょうか、とても重要な部分に関してはそういう処理をするということも常々考えていますけれども、お考えをお聞かせください。

【ウェイマイヤー】「たま」の場合は漢字が 2 つありますが、全く同じ意味なのでしょう。この「たま」、霊と魂……。

【井上】つまり、「みたま」という表記で漢字が複数、「みたま」という音が一つですね。それを英語で「みたま」は *mitama* というふうにローマナイズして、括弧の中でそれぞれの言葉、この事実のときにはこういう訳語を当てるとするような、そういうやり方はいかがでしょうか。

【ウェイマイヤー】例えば、あるときは *soul* という訳を選んで、別なところで *spirit* というふうに分けて翻訳する。一貫して翻訳するということでしょうか。

【安蘇谷】実は『神道事典』で私も「靈魂観」という項目を書きましたが、書けないのですよ、本当は(笑)。どういうことかということ、つまり、文献の上で神道の靈魂観というのはきちんと決まらない。まあ私はそれを書けというから書きましたが、正直なことを言えば非常に曖昧です。

いま井上さんが言っていた「みたま」という言葉について、注をつけるなり何なりで、私も一応 *mitama* で通していいのではないかと思います。私は『古事記伝』の研究家でも何でもないのでわかりませんが、「みたま」という靈魂の「魂」と、「霊」の字の使い分けが、ある程度漢字の中で、例えば、「魂」の場合には「魂魄」の「魂」という例があります。恐らく、人の場合には「魂魄」の「魂」を使う。神の場合には、「霊」を比較的使うのではないだろうか。あるいは、そういう区別があるかもしれません。

そういうことでの相違は、私どももきちんと調べないといけないかもしれませんが、私もいまの翻訳に関しては *tama* あるいは *mitama*、それに対して注を付けて、*soul* とか *spirit*。というのはそれこそ英語そのもの、あるいはラテン語からきた一つの伝統がありますから。「息吹き」とか何とか。その「息吹き」ともつながるところがあるんですけども。ですから、そういう言葉ではなくて「みたま」は「みたま」で、注を付けて説明されたほうがベターではないだろうかと思自は思います。

【ウェイマイヤー】これはどういうわけか知りませんが、例えば、英語の場合は「たま」を *spirit* と訳すけれども、ただ「和魂 (にぎみたま)」「荒魂 (あらみたま)」になると、そのまま訳さないで *aramitama*, *nigimitama* にしておくんですね。

【安蘇谷】「荒魂」「和魂」「幸魂 (さきみたま)」「奇魂 (くしみたま)」、こういう言葉は有名なんです。古典に出てきますから。例えば、神社に天照大御神の荒神霊をお祭りするお宮があるわけです。ところが、それがどういう意味なのかというのは、やはり漢字から、荒だから荒々しいとか、力が強いとか、そういうふうな解釈しかしていない。

なぜそうなっているかということ、それ以上の説明がないんです。ですから、「靈魂観」が

先ほど書けないと言ったのは、それがきちんとしていなくて、皆自分勝手に言っているわけです。例えば、岡熊臣という国学者は死後の靈魂にまで結びつけて、自分で勝手な解釈をしたのを書いているわけです。

ですから、根拠がなくて、つまり靈魂観を4つに分けるという根拠が一応古典にはありますが、それをどういうふうに理解したかということの統一した解釈ができない。そういう意味で申し上げたわけです。反論があったら教えていただきたいと思います。

【司会】はい、どうぞ。

【中野裕三】国学院大学の中野です。大変難しいお仕事をされていることに敬意を表します。先ほどの「荒魂」「和魂」の問題ですが、私もそのことを考えています。本居宣長の場合、「荒魂（あらみたま）」、もう一つ、「荒御霊（あらみたま）」、この両方を使っています。

私は『古事記伝』の「あらみたま」にとくに関心があるのでよく読んでいますが、宣長の意識の中で使い分けは別にしていらないように思います。あるときは「荒魂」、あるいは「荒御霊」。ここを見ると、宣長は特別な使い分けはしていないように思います。宣長の表記の違いを翻訳の中で表すのは難しいのではないかと。日本語の論文で、宣長がいつ「荒魂」を使っているか、いつ、「荒御霊」を使っているか、それだけで論文のテーマになるようなものだと思います。だから、そこまで細かくやっていかれると、翻訳という非常に重要なお仕事がなかなか完成しないのではないかという感想を持ちました。

【ウェイマイヤー】ありがとうございました。井上先生がおっしゃってくださった点と関連しますが、キータームがあればそれを決めて、他は同じ訳、英語の言葉を使ってどんどん翻訳していくほうが経済的ではないのかというご指摘の中に、そういう意味も含まれていたような気がしますけれども。

一つの方法は、例えば翻訳して別の英語を使ったときには spirit, soul, force, power。でも、括弧の中には「たま」と入れる。そういう方法を使って、英語も日本語もきちんと出てきますからはっきり示すことができます。翻訳するけれども日本語の言葉も出てきますから、よくわかると思います。

キータームということに対して私は少し抵抗を持っているかもしれません。ですから、私はまだベンテリー先生のように『日本書紀』のような大きな仕事には手を出していません。

【司会】キータームを決めて、翻訳者はやはり使い分けようとするのですが、読者は必ず同じような解釈をするかどうかという問題があります。ですから、本当に難しい問題だと思います。はい、どうぞ。

【森】いままでの議論を伺っていて、翻訳にどこまで何を要求するのかという問題を、翻訳者も読者の側もわきまえて読まないと、生産的ではないことが明らかになったと思います。例えば、安蘇谷先生のご発言にあったようなことは、我々神道研究者、とくに神道プロパーと呼ばれる中でやっている者としては、どうしても翻訳の中に教典としての翻訳を求めているような気がします。つまり、『古事記伝』を『古事記』の教典の文献として訳してほしいという要求が入ってきているように思います。

しかし、『古事記伝』というのは宣長の解釈で、『古事記』を扱っているけれども宣長の解釈ですね。そういう資料、あるいは語学文献として翻訳されている場合もあるわけで、そここのところをどういう立場にかかわって、例えば、キャラクターの大きさをどう設定していくかという問題も、おのずと決まってくる問題ではないかと思いますが。

【安蘇谷】「教典」というのはどういう意味で？

【森】聖典というか、聖なるテキスト……。

【安蘇谷】いや、そんな意識は全くありませんでした。

【森】ですが、例えば本文と解釈、キャラクターを分けていくというのは、もともと儒教經典の漢籍のスタイルを真似てやっているわけです。そのときには、本文と解釈の地位の違いというものを表現することが非常に重要な問題ですから、そこにこだわるというのはやはり教典としての翻訳を求めているのかなと思います。

【安蘇谷】そうではなくて、事実を事実として理由づけをきちんとしておいたほうがよろしいのではないかという、それだけの話です。別に、『古事記伝』を教典にしようとか、そんな意識は全くありません。

【森】凡例で示せばいいことになるでしょう。

【安蘇谷】凡例ではなくて、訳すときに、先ほど言ったように外国人に対してはあまり愛国心とか何とかを強調するのは理解の妨げになるとおっしゃったから、それに対して言っているだけです。

【森】その問題ではなくて、もっとマテリアルな次元でのキャラクターの大きさをどうするかというお話をなさったように思いました。

【安蘇谷】いえ、全然そんなことは言っていません。

【森】それは私の誤解だったようです。もとの媒体の本文部分と、それから宣長の解釈の部分と、それから黒括弧の部分、これは活字本のほうでも一応反映したやり方になっていますが、例えば翻訳の場合で中国の漢籍の場合、四書五經の經典の翻訳なんかの場合は、その辺の処理はどのようになっているのでしょうか。同じキャラクターでずっと？

【安蘇谷】それは知らない。私がさっき言った黒括弧のことで誤解したわけ？

【森】諸本の校訂関係をずっと見ていって、何段階かの校訂の手続きを踏まえなければ翻訳できない、というわけではないですね。

【安蘇谷】そういうことを言っているのではなくて、黒括弧のところも本文と同じ大きさにしたというから、それについては注だということをきちんと示すような方法にしたほうがいいのではないかという意味です。

【森】区別がつけばいいわけですね。

【安蘇谷】そう、区別がつけばいいんです。

【司会】はい、どうぞ。

【葛西賢太】宗教情報センターの葛西です。私はスピリチュアリティという言葉が、日本語でどういうふうに着定していくのかということを研究しております。今日の話は大変興味深く聞かせていただきました。

それで一つ思ったのが、スピリチュアリティという言葉、先生の場合は spirit という言葉ですが、日本語から英語に、そして英語から日本語になったときに、どんなことが起こってくるのかということを考えていただければと思います、お話をさせていただきたいと思っています。

例えば、仏教の禅がありますが、ユング心理学者たちが禅のテキストを読んで、それを英語やドイツ語に置き換えて、それがまた日本人に読まれるときに、例えば京都学派と呼ばれる人たちが禅について語るよりもよほどわかりやすく、そして新しい光をもって日本人の前に魅力的なものとして立ち上がっていくことがあります。それと同じように、本居宣長の非常に難しく、井上先生が言われたようにあまり日本人には馴染みがないテキストが、新しい光をもってくる。教典としての正確さは失われるかもしれませんが、例えば先生の翻訳のようなことを通して、新しい光を持って神道のテキストが読まれるという可能性もあって、これはとてもおもしろいことだなと思います。これはコメントです。

もう一つは、先生がアメリカで『古事記伝』を出されるということですが、どんな読者が想定されているのでしょうか。比較神話学の人たちか、日本研究の人たちか、あるいは純粋に日本文化に興味を持っているアメリカの普通の一般市民か、そういうところを先生のご承知の範囲で教えていただきたいと思います。

【ウェイマイヤー】ご指摘、ありがとうございます。最後におっしゃった質問ですが、多くの読者は日本史を勉強している学部生から大学院生までだと思います。多分、全部読まないで部分的に読むと思います（笑）。

【司会】そこで付け加えさせていただきますと、禅の例がありましたが、禅は普遍的な宗教、神学として外国人も読むと思います。そして、神道の場合はどれほど日本独特のもので、どれほど普遍性を持つか、どれほど『古事記伝』を読んで自分の心が打たれるかという問題は非常におもしろい問題になると思います。

はい、どうぞ。

【レヴィ・ミクロークリン】国学院大学日本文化研究所調査員のレヴィです。『神道事典』の翻訳者の一人で、英訳の悩みが山のようにいっぱいあります。いろいろな質問がありますが、まず、用語集を集める利点はどのくらいあるか。『神道事典』の他の翻訳者たちから、いつ用語集を作るか、という質問が出てきています。もし、用語集を作ったら、役に立ちますか、あるいは、息苦しいことになりますか。

もう一つの質問ですが、『古事記伝』の英訳をしたときに、例文、いままで英訳された例がどのくらい見つかりましたか。また、どこで見つかりましたか。

【ウェイマイヤー】例文ですか。

【レヴィ】例えば、英語で書かれている、国学に関する論文にある用語、概念とか、いままで説明されたことは同じふうに使いましたか。

【ウェイマイヤー】あちこち探して勉強した上で、まとめていくことですね。

【レヴィ】一つの基準づくりをしましたか。例えば「みたま」の場合はどこからとりましたか。それとも、自分で考えて研究されましたか。

【ウェイマイヤー】いいえ。日本の優れた点は辞書を作ることですね。『神道事典』、『国史大辞典』、『日本語大辞典』、いろいろな辞典の定義を調べて考えた上で、そして、本居宣長の『古事記伝』ではどういう意味を使っているか、考え合わせた後で英語にします。

【司会】恐らく、レヴィさんのお話は、他の翻訳者たちが「みたま」をどういうふうに訳したかを一応リストを作って、それを参考にしながら、ということでしたが、というより、ご自分で日本語の資料から判断をつけたということですね。

【ウェイマイヤー】はい。

【司会】最初の質問をもう一回、お願いします。

【レヴィ】はい。用語について、もし例文が集まってきたら、とくによく出てくる用語は、こういうふうにあらかじめ英訳されたものが参照できるようになるわけです。私は、雰囲気によって必ず違うふうに訳す必要があると思いますが、他の方からは違う意見があるので、どう思いますか。

【ウェイマイヤー】「たま」以外に、何か例がありますか。

【レヴィ】先生のご経験の中にそういう例がありますでしょうか。

【司会】例えば歴史のタームとして、例えば、「勘定奉行」という言葉があって、financial magistrate, financial commissioner, judicial commissioner, magistrate in charge of bakufu lands, ... いろいろな違う翻訳の経験がいままであって、そういうような例文集をつくれば役に立つか。この場合は宗教関係、神道関係の言葉をあらかじめ、いままでの翻訳の例をつくって、それに沿って翻訳すべきか。それとも、自分でこの本来の意味は何かを考えて自分独自の翻訳をつくるか。どちらか、という問題だと思いますけれども。

【ウェイマイヤー】もちろん、そうしたほうがいいですね。そうしないと、とんでもない変な英語の言い方、だれにもわかってもらえないような言い方をしてしまうとまずいでしょうから。

【司会】ほかに、翻訳の経験者があちこちに見当たりますので、そちらのほうからのご意見はいかがでしょうか。

【チャールズ・ドウウルフ (Charles De Wolf)】慶應義塾大学のドウウルフです。さっき読者の問題が出てきましたが、ちょっと変な言い方かもしれませんが読者にも責任があると思います。また、歴史的に言葉の意味が変わってくるし、その時代によって解釈が変わってきます。具体的な例を挙げると、古代英語では God という言葉があります。現代英語と同じ「神」ですが、古代英語では区別します。中性名詞 *thæt God* ではキリスト教でない神様です。そして、男性名詞 *se God* ではキリスト教の神様です。現代英語ではもちろん冠詞の違いもありますが、男性名詞・中性名詞もありますが、それでも誤解はありません。誰でも区別できるようになります。

また、日本語では、「カミ (神)」という言葉はキリスト教の意味で使われていなかったわけですが、現代ではカトリック信者でも、プロテスタントでも「カミ (神)」という言葉が平気で使いますね。ですから、もちろん解釈の問題はありますが、その問題を乗り越えて説明できれば読者の責任になります。想像力も必要。それから比較宗教の意識がなければ

ばどうしても理解できないでしょう。

【司会】ありがとうございます。はい、どうぞ。

【森】読者の責任ということのキーワードにかかわってですが、先ほどから「たま」という言葉をどれだけ正確に訳せるかということがいろいろ議論になっていますが、まず第1点として『古事記伝』について言えば、『古事記』の本文の「たま」、あるいは、いろいろな古典籍に出てくる「たま」という言葉をひとしなみに定義するのは難しいかもしれないけれども、『古事記伝』で宣長が自分の解釈で使っている場合は、これは彼のちゃんとしたコンテクストと理解の上に立った使い方なので、キータームとしてそのまま *tama* と残すのではなくて、先生のように全部翻訳されたのは正当な行為だったと思います。

また、「たま」を *spirit* としてしまったら、また誤解を生むのではないかというのも、やはりその *spirit* という言葉がどのような文脈の中にあるかを見ていけば、当然理解できることです。ですから、あまりこの問題に神経質になって翻訳の限界とかを言う必要はないなと思いました。

日本語のキータームの多様性ということばかり言ってしまうと、翻訳の肝心な意味というか、日本語と全く同じになることを求めている……キータームをどこまで残すかという議論はなるべく少なくして、開いた訳にしていこうという方向性で私は支持している、ということをお伝えしたかったわけです。

【司会】はい、どうぞ。

【櫻井治男】皇學館大学の櫻井です。興味深いお話を聞かせていただいて、ありがとうございました。「たま」から離れてよろしいでしょうか(笑)。私は、翻訳という問題と、もう一つは、神道に翻訳という行為がどうかかわってくるのかについて、自分の質問をしたいことがあります。

1点は、先ほど森さんが少し話しましたが、今回、先生の作業は『古事記』、そしてその注釈書を翻訳されたと思います。そうした中で、たまたま(4)の(イ)の例に、「天照大御神」という神の名前が登場します。これは、本文で神の名前は翻訳をされてお使いになっているのでしょうか。

それとも、それは *Amaterasu ōmikami* としておいて、宣長はこれを『古事記伝』の中では理解している場合に、多分 *Sun Goddess* か何か、そういう理解をしているようなものだと思っています。そうした場合に、本文と注釈での神の部分というのは、あくまでも宣長の理解だという問題が一つ残るのかなと思います。

こういうことを踏まえますのは、今回、神道理解ではテキストを中心にその解釈が出ていますが、現実の伊勢の祭神という問題を理解するところで、伊勢の神宮の祭神をどう翻訳していったらいいのか。それは、古典での誰かの解釈の一つを応用するのかという、そういう問題がさらに翻訳という点では起こってくるような気がします、こういった点についてお考えがあればお聞かせいただきたいと思います。

【司会】それは「天照大御神」を固有名詞として使うか、神の定義として使うかということですか。

【櫻井】テキストでの翻訳の問題として、天照大御神というものが太陽の女神であるという理解と、いや、あれはあくまでも大神に中心があって、天照というのは太陽とは関係ないという解釈もあるわけです。

宣長は、確かにそうした太陽神的な理解を示しているとすれば、その翻訳はその限りでいいと思います。しかし、今度はそうして翻訳しておいたことが、例えば、伊勢の神宮というようなところで現実には天照大御神がお祭りされているという、そういう場合に影響を及ぼす問題。これについて、議論しなくてもいいかなと思ったわけです。

【ウェイマイヤー】本文のほうでは、どちらかというと日の神様という意味が強いわけですか。一の巻ですから本文と注釈という形ではなくて、一の巻はほとんど宣長の注釈です。ですから、注釈を中心にしました。そして、英語にするとときに *Amaterasu ōmikami*、そのままにして、いわゆる *Sun Goddess* とか、*sun* との関係を何も書きませんでした。

【司会】この場合は、やはりキータームの問題が出てくると思います。大体英語圏では、天照大御神はよく *Sun Goddess* という名前で知られていますので。貴重なご指摘をありがとうございました。

それでは、これで質疑応答を終わりたいと思います。ありがとうございました。

【ウェイマイヤー】ありがとうございました。（拍手）

注

¹ Motoori Norinaga (author), Wehmeyer, Ann (trans.). *Kojiki-Den*. Ithaca, N. Y.: East Asia Program, Cornell University, 1997.

² 大野晋・大久保正編集校訂『本居宣長全集』第9巻、筑摩書房、1968年、3頁。

³ 同書、18頁。

⁴ 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』岩波書店、1974年、62頁。

⁵ 『本居宣長全集』第9巻、18頁。

⁶ 同書、4頁。

⁷ 同書、31頁。

⁸ 同書、23頁。

⁹ 同書、34頁。

¹⁰ 同書、37頁。

¹¹ 同書、6頁。

- ¹² 同書、8 頁。
- ¹³ 同書、11 頁。
- ¹⁴ 同書、11 頁。
- ¹⁵ 同書、11 頁。
- ¹⁶ 同書、49 頁。
- ¹⁷ 同書、59 頁。
- ¹⁸ 同書、59 頁。
- ¹⁹ 米井輝圭「たま」國學院大學日本文化研究所編『神道事典』弘文堂、1994 年、390-1 頁。
- ²⁰ 『本居宣長全集』第 9 卷、18 頁。
- ²¹ 平田篤胤全集刊行会編『新修平田篤胤全集』第 15 卷、名著出版、1978 年、191 頁。
- ²² 『本居宣長全集』第 9 卷、49 頁。
- ²³ 高木市之助・富山民蔵編『古事記総索引』平凡社、1974 年。
- ²⁴ Ng, Wai-Ming. *The I Ching in Tokugawa Thought and Culture*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2000.
- ²⁵ *Ibid.*, p.111.
- ²⁶ *Ibid.*, p.111.
- ²⁷ 『本居宣長全集』第 9 卷、3 頁。
- ²⁸ 同書、4 頁。
- ²⁹ 同書、4 頁。
- ³⁰ 同書、31 頁。
- ³¹ 同書、31 頁。
- ³² 同書、32 頁。
- ³³ 同書、33 頁。
- ³⁴ 『新修平田篤胤全集』第 15 卷、181 頁。
- ³⁵ 同書、183 頁。

³⁶ 同書、184頁。

³⁷ Nippon Gakujutsu Shinkokai (trans.). *The Manyoshu: One Thousand Poems*. Tokyo: Iwanami Shoten, 1940.

³⁸ Levy, Ian Hideo (trans.). *The Ten Thousand Leaves: A Translation of the Man'yōshū, Japan's Premier Anthology of Classical Poetry* (Books 1-5). Princeton: Princeton University Press, 1981.

³⁹ Philippi, Donald L.(trans.). *Kojiki*. Tokyo: University of Tokyo Press, 1968.

